

154 「マチスモ」

永年勤務した会社を定年退職し、最就職するまでの1ヶ月半、スペインのセビリアに滞在した。フラメンコ好きが高じて何度かスペインに行ったが、現役時代はせいぜい1週間から10日ほどの旅行だった。それでは満足できず、定年を迎えたら是非スペインに長期間滞在しようと思っていたのである。

3度目のスペイン旅行のとき、フラメンコの本場セビリアでペペ（ホセ・ルイス・バスケス）と知り合い、それからはペペの家をホテル代わりに、アンダルシア地方を中心にスペイン各地を巡るようになった。

この長期滞在についても、ペペの家の近くにアパートを手配してもらいそこで自炊、ペペと彼の家族に大変お世話になった。

滞在中はペペに誘われ、ほとんど毎日のように近くの“バルコン”というバーで午前中からビールやワインを飲み、多くの人々と話した。そして、時々小旅行をしたり毎日が楽しく夢のような日々だった。

ある日、車で2時間ほどのスペイン西部、バダホス地方・メリダにある古代ローマの遺跡を観て帰り、ペペとバルコンで飲んでいると、ペペの友人のミゲルと奥さんのビルヒニアが加わった。

二人は今、ロンダから帰ってきたとのこと。ロンダはセビリアの南東にある街で、近代闘牛のスタイルを生み出したフランシスコ・ロメーロなど、有名な闘牛士を育んだ町として有名である。

ビルヒニアの故郷ロンダで婚礼があったそうで、親戚が多くいろいろ気を使い、非常に疲れたと言っていた。親類の中にモロッコの女性と結婚した人がいて、近々生まれてくるその子供の名前でもめているとのこと。モロッコが感じられるような名前を付けたりすると、差別され苦労することになるということかも知れない。

しばらく話していると、ビルヒニアから“日本の女性は結婚すると姓名はどうなるのか？”という質問があった。“女性の姓は男性の姓に変わる”と言うと、突然彼女は厳しい表情になり、それは「マチスモ！」だと言いこちらが驚いた。「マチスモ」とは男性優位を意味する言葉である。

女性の姓がなくなってしまうことなど信じられない、日本はもっと進んでいる国だと思っていたのに、ガッカリしたと言うのである。正確には、夫か妻のどちらかの姓を選ぶということなのだが、説明が難しくなってしまう。結局私のスペイン語力ではうまく説明することはできなかった。

ローマの遺跡を見て、遠く古代ローマに思いを馳せ、せっかくいい気分一杯飲んでいたのに、最後は悔しい思いで家に帰ることになった。

彼女と別れてからのペペの説明は、最近のスペインの状況はあらゆる方面で女性の進出が目覚しいため、今度は男性側が逆襲に出て、女性側を相当叩いているのだという。そんなことがあって、進歩的な考えを持つビルヒニアは、日本では姓名のことで女性が差別されていると思い、日本人である私に食ってかかって、鬱憤を晴らしたのではないか？ということだった。

日本では法律上夫婦別姓（民法上は「姓」でなく「氏」が正しい）が認められていない。婚姻に伴い、夫か妻のいずれかの姓を選択しなければならないことを法律で定めている国は日本だけである。

諸外国では、伝統的に妻が夫の姓を名乗ることはあっても、婚姻を理由に個人に姓の変更を法律で義務付けている国はない。アメリカやイギリス、オーストラリアなどでは選択的夫婦別姓が認められてお

り、フランスや韓国、中国などは原則別姓である。

日本においても、女性の社会進出に伴い、姓が変わることによる職業上や生活上の不便・不利益、アイデンティティの喪失など様々な問題点が指摘されてきたことなどを背景に、選択的夫婦別姓の導入が求められて久しい。

しかし、選択的夫婦別姓の導入に対し、例えば(1)夫婦同姓が日本社会に定着した制度であること(2)姓は個人の自由の問題ではなく、公的制度的問題であること(3)家族が同姓となることで夫婦・家族の一体感が生まれ、子の健全な育成に繋がること、などを理由とする反対意見がある。

この反対意見は、一部の有力政治家や政党、政治団体などにより強く主張されているのが現状である。

ところが、最近有力経済団体が、選択的夫婦別姓の早期実現を求める政府への提言を公表。

民間企業などでは、改姓によるキャリアの分断を避けるために結婚後も旧姓を通称として使用することが定着しているが、「通称使用」によるトラブルが「企業にとっても、ビジネス上のリスクとなり得る事象であり、企業経営の視点からも無視できない重大な課題」と指摘した。有力経済団体（経団連、経済同友会）は、政治家への多大な団体献金をしていることから、今後の進展に注目である。

選択的夫婦別姓は、同姓・別姓を選べるようにするもので、社会的なコンセンサスを取りやすいはずであり、上記反対理由の説得力は弱い。

似かよった問題にジェンダーの問題がある。

ジェンダーとは、「男性だから・女性だから」というだけで「男性はこうあるべき、女性はこうあるべき」というように、それぞれが所属する社会からさまざまな圧力を受けることをいう。

それは既に述べたように男性優位（スペイン語で「マチスモ」＝“雄”を意味するmachoに通じ、男性の力、勇気、性的能力から生まれる男尊女卑の思想）が、世界各国において長年続いてきたことに対する反動といえる。

諸外国において男性が優遇されてきた理由は、以下のとおりほぼ共通している。

- ・男女の役割分担についての社会通念、慣習、しきたりなどが根強い
- ・女性が能力を発揮できる環境や機会が十分ではない
- ・育児、介護などを男女が共に担うための制度やサービスなどが整備されていない
- ・能力を発揮している女性を適正に評価する仕組みがかけられている
- ・男女の差別を人権の問題としてとらえる意識が薄い
- ・専業主婦に有利な税制や社会保障制度などが男女の役割分担を助長している

これらは“力”や“肉体的優位性”をもとに、男性が作り上げてきたものである。

特にジェンダーに遅れた日本は、ジェンダーギャップ指数 0.663（2024.6.12 発表）世界 146 か国中 118 位という実態である。（ジェンダーギャップ指数は“0”が完全不平等、“1”が完全平等）

内閣府にある男女共同参画局の基本方針を見ると“女性活躍推進”の文字が目立つ。この言葉だけでも、いかに男性が女性の社会進出を阻害してきたかがわかる。

女性活躍を端的にいえば、国・地方公共団体や民間企業において、女性の登用や男性の育休取得率を高めるとのことだ。

ここからが本題である。

ジェンダーとは社会的、文化的に作られた性差であり、生物学的な性差 (sex differences) とは異なる。それでは、生物学的にはどうなのか？

『生物と無生物のあいだ』の著者、生物学者 (分子生物学) 福岡伸一氏の著書『できそこないの男たち』に非常に興味深い記述がある。以下、要点を引用する。

生物は女性のほうが基本形であって、男性は付録のようなものである。付録は酷使される。その実例について見てみよう。

アリマキ (アブラムシ) という小さな虫の生活を見ると、私たちがはるか祖先が性をどのように扱っていたのかが手にとるようにわかる。そして男とはどのようなものであるのかも。

アリマキにとってそれぞれの個体の生と死は、それがどのような形のものであれ、時間の流れの中の一瞬の必然でしかない。なぜなら、アリマキはすさまじい繁殖力によって爆発的に増え、世代は連綿と前進し続けているからである。そして、アリマキの繁殖力はひとえに、アリマキの世界が基本的にメスだけでなりたっていることによる。

メスのアリマキは誰の助けも借りずに子どもを産む。子どもはすべてメスであり、やがて成長し、また誰の助けも借りずに娘を産む。こうしてアリマキはメスだけで世代を紡ぐ。しかも彼女たちは卵ではなく、子どもを子どもとして産む。哺乳類と同じように子どもは母の胎内で大きくなる。ただし哺乳類と違って交尾と受精を必要としない。

この全く無駄のない高速の繁殖戦略に太刀打ちできる生物はほとんどいない。メスとオスを必要とする有性生殖。私たちヒトを含む多くの生物が採用する方法は、アリマキの目から見たら気の遠くなるほど効率の悪いものに映るだろう。

私たち有性生物は、パートナーを見つけるため、常々右往左往し、他人が見たら馬鹿げた喜劇としか思われようのない徒労に満ちた行為を、散々繰り返してようやく交接に至る。首尾よく成功したとしてもそこで受精が成立する可能性はそれほど高くない。その後、生まれた卵あるいは子供を保護し、生殖年齢まで育て上げるためには驚くべき時間とコストがかかる。アリマキたちにはこの一切がないのだ。

ところが、アリマキたちには、この優れて効率のよい自分たちの生活の仕組みを変えるときが来る。1年に1度だけ。春から夏にかけて気温が高く、食糧となる植物がいつでも繁茂しているような環境では、アリマキたちは母から娘へと世代をつないで繁殖する。しかしやがて秋を迎えると、これまでとは違うやり方で子どもを作る。

ある遺伝子のスイッチを入れて、自分たちのプログラムの基本仕様に分岐路を作る。分岐路から基本仕様を外れて特別なカスタマイズ経路をたどったもの、ここに初めてオスのアリマキが産み出される。

アリマキはどのようにしてオスを作り出すのだろうか。それはヒトの場合と原理的には同じ方法である。というよりも、むしろヒトがアリマキの方法を踏襲したといえる (2億年前すでにアリマキたちはこの地球上に存在していた。その時代を反映する地層から発見された琥珀の中に、今とほぼ同じ姿のアリマキが封じ込められている。アリマキは生物としてはヒトよりもずっと先輩にあたる)。

つまりメスを変えてオスを作る。ただしヒトに比べ、より原始的な方法で。

アリマキの基本仕様はメスである。アリマキは基本仕様としてのメスをカスタマイズしてオスを作る。ヒトの場合、基本仕様としてのメスのプログラムをオスへと分岐させるスイッチとしてY染色体上のSRY

遺伝子【SRY：Sex-determining region Y「Y染色体性決定領域遺伝子」は哺乳類のY染色体上にあり、胚の性別を雄に決定する遺伝子】があった。

実は、アリマキの場合、何が分岐のスイッチとなっているのか、ヒトの場合ほど明確にはわかっていない。わかっているのは、気温が下がり夜が長くなると、メスのアリマキの身体の中で特殊なホルモンのバランスが変化するということである。

これが染色体の構成を変える。アリマキのメスは性を決定する染色体として二つのX染色体を持つ。つまり、ヒトと同じXX型をとる。季節のよいあいだ、すなわちメスがメスだけで世代を繋いでいるとき、染色体はそのまま複製され、母のXX型は、娘のXX型へとコピーされる。ここにはY染色体は存在しない。おそらくメスをオスにカスタマイズするためのY染色体は、生命の進化においてもっとずっと後になって作り出された仕組みなのである。アリマキたちは、より原始的な方法でオスへのカスタマイズを行った。

ヒトの場合で見たとおり、基本仕様としてのメスには過分も不足もない。付け加えるものも、わざわざ捨てるものもない。オスだけが、不要なミューラー管【輸卵管や子宮などの雌性の生殖器に分化するもの生殖管】を殺し、急作りの造作を加えた。この原則は、アリマキでも同じである。メスをオスにするには、何かを捨て、何かを転用しなければならない。全く何もないところから、例えばY染色体のようなスイッチを作り出すことはできない。

そこで、アリマキはメスの仕様から、一段階、あえて減らすことを行った。2本あるX染色体をひとつ捨てることにしたのだ。XX型がX型となる（1本X染色体がなくなったことを示すために、このような場合X0型と表記する）。X0型になれば、文字通りXX型に比べ、性染色体に載った遺伝子の情報量は半減する。情報量が半減すれば、そこから作られるタンパク質量、つまり遺伝子の作用量もおおむね半減する。そして、その結果、できそこないのメスとしてオスが産み出されることになった。

アリマキのオスはどことなく哀しく見える。たつぷりと蜜を吸って、動きも緩慢、豊満な身体のメスに比べると極めて対照的だ。オスは干からびたような、がりがりにやせた身体をしており、手脚も華奢だ。それをばたつかせながら落ち着きなくあちこちを走り回る。彼らにはするべきことがあるのだ。オスのアリマキの役割はただひとつ。秋が終わるまでに、できるだけ多くのメスと交尾をすること。彼らは一瞬の休みもなくメスの間を渡り歩いて、命が尽きるまでその勤めを果たさねばならない。

アリマキのオスは、精子をメスに届ける。そして後年明らかになったように、ヒトの場合でも、精子の中には、普通の体細胞が保持している染色体の半分が送り込まれる。ヒトの体細胞は、22本の常染色体（性染色体以外の染色体）をそれぞれ2組ずつと、性染色XX（メス）かXY（オス）を持つ。精子はこれが半分に分配され、22+Xと22+Yの精子が半々に作られる。メスの卵子はXXが均等に分配されるので、22+Xの1通りとなる。

アリマキのオスの体細胞の染色体の構成は、n本の常染色体2組ずつ（nの値はアリマキの種類によって異なる。少ないものは数本、多いものは30本以上）とX0型の性染色体、つまりX染色体が1本である。これが半分半分に分配されるとどうなるか。n+Xの精子とn+0（X染色体を1本も持たない）精子ができることになる。

一方、これを受け取るメスのアリマキの方はどうなっているのだろうか。オスと交尾するメスは、このときすでに、誰の手も借りずに娘を次々に産んでいたメスとは違った身体をしている。外見的には変化はない。しかし身体の中に卵子を用意しているのだ。2n+XXの染色体型が、卵子では半分に分配され、

$n+X$ となる。

ここで不思議なことが起こる。オスの精子のうち、 $n+0$ 型、つまりX染色体の分配にあずかれなかった精子は、その後まもなく死んでしまうのである。これがなぜなのかはわかっていないが、X染色体に乗っている遺伝情報は、2倍量（XX）なら完成形のメスを、1倍量（X0）なら不完全なメスとしてのオスを作り出し、全く存在しない（0）と、生命（この場合は精子細胞）を維持することができないということを示している。したがって、アリマキのオスの精液の中に含まれる精子は、必然的に、 $n+X$ 型の1種類だけになる。これは何を意味するだろうか。

メスの卵子は $n+X$ 型のみ、オスの精子も $n+X$ 型のみ。するとこれが受精してできる受精卵の遺伝子型は一義的に、 $2n+XX$ 型の1通りしか存在しないということになる。 $2n+XX$ 型、それはすなわちメスである。

冬が近づくとアリマキたちは、初めてオスを作る。オスはメスを探して交尾し、精子と卵子が受精して受精卵を作る。メスは受精卵をどこか安全な場所、草木の隙間や厚いコケの下などに産む。受精卵はすぐには発生を開始しない。硬い殻に包まれ、低温、凍結、乾燥などに耐える。その耐性は、やわらかい身体を持つ成虫のアリマキよりもずっと強い。だから冬が例年になく、長く厳しいものであつたとしても次の春まで生き延びるチャンスが大きい。

雪が解け、風の中にわずかながらやわらかさが感じられる、新しい年のある日、受精卵からアリマキたちが孵化してくる。アリマキたちの遺伝子型はすべて $2n+XX$ 。新しい春の新しい命は、全員がメスとして開始される。メスたちは本来のあり方に戻る。誰の力も借りず子どもを産む。生まれた子どもたちもまた全員がメスである。娘たちはすぐにまた自分だけで子どもを産む準備を始める。細い口吻を植物に差し込んで、たっぷりと蜜を吸う。

メスはメスだけで命を紡いでいく。しかし、今年のメスは去年のメスとひとつだけ違うことがある。それは昨年秋、ほんの一瞬現れたオスによって、メスとメスの遺伝子が、新たに出会い、交換されているということだ。

出会いと交換によって何が生み出されるか。それは誰にも予想できない。ただ、これまでと異なる多様性が生み出されることだけは確かだ。その多くは、新しい環境に対してあまり有利に働くものではないだろう。あるいは有利にも不利にも働かないかもしれない。しかし遺伝子の交換によって、ほんのわずかだけ、変化がもたらされることがある。すこしだけ乾燥に強い。わずかだけ凍結に耐えられる時間が長い。エネルギー変換の効率がちょっとだけ優れている、、、

一冬の間にかかる大規模な気候変動の結果、大半の受精卵が死滅してしまうようなこともあるだろう。あるいは季節のよいときであっても、ローカルな環境変化が急激に襲ってくることもあるだろう。その際、前の年にシャッフルを受けた遺伝情報の組み合わせからほんのわずかながら、その試練をかいくぐって生き延びる者があればよい。生命は常にその危ういチャンスに賭け、そして流れを止めることなく繋げてきたのである。

地球が誕生したのが46億年前。そこから最初の生命が発生するまでにおよそ10億年が経過した。そして生命が現れてからさらに10億年、この間、生物の性は単一ですべてがメスだった。

メスたちは、オスの手を全く借りることなく、子どもを作ることができた。母は自分にそっくりの美しい娘を産み、やがてその娘は成長すると女の子を産む。生命は上から下へまっすぐに伸びる縦糸のごとく、女性だけによって紡がれていた。それぞれの縦糸を担う女性は自分たちの姿かたちに尊厳と誇り

を持っていた。女性たちは自分を他と比べることもなく、嫉妬や羨望といったものも存在しえなかった。

なぜなら自らの縦糸を途切れることなく紡いでいくことのみが、生きることのすべてであったからである。こうして地球上の生命はそれぞれその命脈を保っていた。子どもを作る仕組みもうまく働いているように見えた。すくなくとも最初の 10 億年の間は。

母が自分と同じ遺伝子を持った娘を産むこの仕組み、すなわち単為生殖は効率がよい。今でも単為生殖で増殖している生物はアリマキを始めとしてたくさん存在する。好きなときに誰の助けも必要とせず子どもを作ることができる。現在、二つの性をもつ生物がその一生の大半を費やさねばならないコートシップ（求愛）の営み、つまり生殖に至るための様々な面倒な手続きが一切不要であるから。

しかしこの単為生殖のシステムにはひとつだけ問題点があった。自分の子どもが自分と同じ遺伝子を受け継いで増えていくのはよい。しかし、新しいタイプの子ども、つまり自分の美しさと他のメスの美しさをあわせもつような、いっそう美しくて聡明なメスをつくれないう点である。環境の大きな変化が予想されるようなとき、新しい形質を生み出すことができない仕組みは全滅の危機にさらされることになる。

生命が出現してから 10 億年、大気には酸素が徐々に増え、反応性に富む酸素は様々な元素を酸化するようになり、地球環境に大きな転機がおとずれた。気候と気温の変化もよりダイナミックなものとなる。多様性と変化が求められた。メスたちはこのとき初めてオスを必要とすることになったのだ。

つまり、メスは太くて強い縦糸であり、オスはそのメスの系譜を時々橋渡しする、細い横糸の役割を果たしているに過ぎない。生物界においては普通、メスの数が圧倒的に多く、オスはほんの少しいればよい。アリマキのように必要なときだけ作られることもある。

本来、すべての生物はまずメスとして発生する。なにごともしなければ、メスは生物としての基本仕様をまっすぐに進み立派なメスとなる。このプロセスの中であって、貧乏くじを引いてカスタマイズを受けた不幸なものが、基本仕様を逸れて困難な陸路へと導かれる。それがオスなのだ。

ママの遺伝子を、誰か他の娘のところへ運ぶ「使い走り」。現在、すべての男が行っていることはこういうことなのである。アリマキのオスであっても、ヒトのオスであっても。

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」シモーヌ・ド・ボーヴォワールはこう高らかに宣言した。つまり、社会が女という役割を女に押し付けていると指摘した。しかし、これは生物学的に見て明らかに誤りである。生物はすべて女として生まれる。だから、女はもともと女として生まれた。ボーヴォワールはもう少しリラックスすべきだったのかもしれない。

彼女の言葉はむしろこう言い換えられるべきなのだ。

「人は男に生まれるのではない、男になるのだ」

あるいはこうもいえるだろう。アダムがその肋骨からイブを作り出したというのは全くの作り話であって、イブたちが後になってアダムを作り出したのだ。自分たちのために。（引用終わり）

福岡伸一氏はネット上で次のようにも述べている。

男性にだけあるように思われているものは、特別なものではなく、すべて女性にあった原器をつくり変えたものだ。このつくり変えのために、男の子は胎児期に大量の性ホルモン（ステロイド）を身体中に浴びる。この性ホルモンは基本的に免疫系を抑制するように働く。それゆえに、男性の免疫系は女性よりも弱く、だから男性の寿命は女性より短く、感染症にかかりやすく、がんの罹患率も高く、ストレ

スに弱いと考えられる。

いまから 10 億年ほど前、ようやく有性生殖の原型がつくられた。単為生殖と有性生殖を切り替えられるアリマキのような存在は、そのときの双方の仕組みを温存している生物である。

現在のヒトのように、有性生殖のみに完全にシステムが切り替わったのは、ここ 5、6 億年のことである。生命史全体から見ると「かなり新しい」といったのはそういうことである。

オスとメスの協力が多様性を生み出した。単為生殖が現在も存続している事実は、有性生殖が必ずしも生命の存続にとって絶対的に有利である、ということにはならない証拠である。

しかし、現在の地球上では、とくにヒトを含む動物、つまり大型の多細胞生物においては、有性生殖が圧倒的に優位にある。なぜ有性生殖が進化上、大勢を占めるようになったのか。

それは、有性生殖が遺伝子をつねにシャフリングし、混ぜ合わせ、結果として新しい順列組み合わせをつくり出し、個性のバリエーション=多様性を生み出すからだ。

多様性の創出がもっとも有利に働いたのは、おそらく感染症に対する抵抗性の差ができたことだろう。生物は、新手のウイルスや細菌に絶え間なく晒されてきた。耐性に差があれば、未知の病原体の襲来にも耐え抜くことができる。かくのごとく、生命が有性生殖を編み出したのは、それだけ変化を生み出すことが重要だったからである。

進化の歴史とは、強いもの、優れたものが生き残ったのではない。集団の中で多様性を大切にした種が生き残ったのである。多様性はその時点では、集団にとって有利か不利なのかわからない。一見、生産性が低く、集団のお荷物に見える場合もあるかもしれない。

しかし、その多様性を包摂することが、長いレンジで生命を考えたとき、もっとも重要な意味をもつことになった。そして、多様性を生み出すものが、メスとオスの協力だった。

最初、オスはメスの縦糸をつなぐためのときどき現れる細い横糸だった。しかし横糸の重要性が高まるにつれ、横糸は縦糸と同じくらい稠密なものとなった。それゆえ、いまやどちらが縦糸で、どちらが横糸であるか区別がつかなくなった。つまり、成り立ちの経緯はどうあれ、二つの性は多様性を生み出すうえで、等価となったのである。言い換えれば、男女の両性がなければ、多様性は生まれていなかった。多様性の中には、逆説的だが生まないことを選ぶ多様性も含まれる。つまり、遺伝子の命令（生めよ・増やせよ）から初めて自由になれることを知ったのも、人類の多様性の成果であり、また基本的人権が尊重される基礎となったのである。

この事実をもとに、私たちは、男女の権利は平等であり、男女の義務も平等であると約束した。そして、人類が現代社会をつくりあげたとき、これを理念としたのである。（2024. 06. 25）